中等教育コース(英語教育専攻),「卒業研究」
担当教員: 秋山正宏 (英語教育講座)

「卒業研究 (2021 年度後期)」: 授業評価に関わる受講生への聞き取りとその結果についての考察

「卒業研究」は，どのコース・専攻に所属する学生にとってもそうであるように，(最低)4 年間の学習の集大成としての卒業論文の執筆を目標として履修する必修科目である。授業評価報告書で「卒業研究」を取り上げることは，異例なことと受け取られるかも知れない。しかし，今年度も新型コロナウィルス感染拡大防止のため，「卒業研究」および「小学校サブコース演習」以外の全ての担当学部科目を非同期型遠隔授業の形式で実施した(第 4 クォーター開始当初の時期を除き)関係で，1 つの授業の全ての受講者を対象として，かつ匿名性を担保できる形で授業評価アンケートを実施することが困難であり，この「卒業研究」を授業評価報告書において取り上げることとした。また「卒業研究」が担う上述のような意義や位置付けを考えると，「卒業研究」およびそれに関連して行われる各種演習に関する評価および考察を行うことには，無視すべからざる意義があるようにも思われる。今回は，今年度に卒業論文を提出し，「卒業研究」の単位を取得することが確定している 1 名の学生を対象に行った聞き取り調査の結果について報告し，若干の考察を行う。

今年度の卒業論文指導は，新型コロナウィルス感染拡大防止のため前期は対面式の演習の実施を控えていたこと，および当該学生が前期に就職活動を行っていたことにより，実質的に後期からの開始となった。演習は，英語会議室・準備室で，ほぼ週に 1 度(火曜日 14 時 30 分から 16 時 30 分前後まで)のペースで行った。研究テーマは，日本語における恋愛のメタファー表現であり，言語学・日本語学の分野の主として意味論に関わる研究であった。演習の内容は，(a) 基本的文献についての講読形式の演習，(b) 関連する日本語表現についてのコーパス/インターネットを用いたデータ蒐集およびインフォーマントを用いた内省調査についての指導，(c) (b)のデータ蒐集および内省調査の結果についての考察と議論，(d) 卒業論文の構成，議論の展開，論文で用いる英語表現に関する指導が，主たるところであった。当該学生を対象として行った聞き取り調査も，上に述べた演習および論文指導の各側面に光を当てたものとなっている。以下は，個々の質問項目とそれについての当該学生の回答，およびそれについての担当者の若干の考察である。

1. この「卒業研究」に関しては，後学期開始以降，ほぼ週に 1 度のペースでゼミ/面会が行われましたが，この点についてどのように考えますか。

a. 回数が少なすぎる
b. やや回数が足りない
c. ちょうどよい
d. やや回数が多い
e. 回数が多すぎる

当該学生は，この問いに関して，b(「やや回数が足りない」と c (「ちょうどよい」)の中間であるとの回答をした。実は，この点については，担当者もほぼ同様の感覚を持っていた。「ほぼ週に 1 度」というペースは例年通りではあるが，メタファーという研究テーマが，担当者が主として研究している分野との隔たりが大きいものであった関係で，ゼミにおける議論や事実関係の検討の進捗が遅いと感じていた。当該学生がメタファーの研究を希望していることは昨年度から分かっていたことであり，ゼミ開始以前の段階で担当者の方で予めゼミの内容について準備することも出来た訳だが，実際には担当者の力量不足，経験不足を感じることも多かった。こうした点は，今後の卒業研究指導に向けての反省材料としたい。

2. ゼミでは基本的な文献の講読，データ蒐集/事実調査に関する指導，データ蒐集/事実調査結果についての議論が行われましたが，これらの点についてお尋ねします。

2.1. ゼミでなされた文献講読についてどのように思いますか。

a. 扱った文献および講読の時間が不十分である
b. どちらとも言えない
c. 扱った文献および講読の時間が十分である

当該学生は，この問いに対し b (「どちらとも言えない」)を選択したが，それに加えて，

「関連文献により多く接したかったが，なかなか難しかった」とも述べている。1 の項目で述べた点とも関連するが，担当者が日頃メタファーの研究を行っていないことを反映して，紹介できる文献が，言語学および意味論についての概説書の中でメタファーに触れているものとたまたま担当者が知り得ることが出来た学術論文にほぼ限定されてしまったことも確かである。要するに担当者の準備不足を露呈してしまっている感もある訳で，この点も今後に向けての反省材料である。

2.2.　ゼミでなされたデータ蒐集/事実調査に関する指導について，どのように思いますか。

a. そうした指導が不十分であった
b. どちらとも言えない
c. そうした指導が十分であった

当該学生は，この問いに関して，c (「そうした指導が十分であった」)を選択した。メタファーの実例を通常のコーパスを用いて蒐集することが難しいことを担当者の方である程度予想していた関係で，研究対象を主として日本の歌謡曲の歌詞とし，インターネット上で使用可能となっている歌詞検索サイトを用いて用例蒐集を行うことを奨めた。結果として，研究対象とするメタファーが恋愛のメタファーになった訳であるが(恋愛について歌う楽曲は当然であるが，極めて多い)，こうしたデータ収集についての指導は好意的，肯定的に受け取られたようである。

2.3.　ゼミでなされたデータ蒐集/事実調査の結果についての議論に関し，どのように思いますか。

a. そうした議論が不十分であった
b. どちらとも言えない
c. そうした議論が十分であった

この問いに関し，当該学生は c (「そうした議論が十分であった」)を選択した。今年度は，文献講読に多くの時間を割かなかった反面，蒐集した実例および恋愛のメタファーについての日本語母語話者の内省調査の結果について議論する時間が多かったが(適切な方向に導くことが出来たかどうかは別として)，この点がある程度肯定的に評価されたのかも知れない。

3.　卒業研究を卒業論文にまとめる作業についてお尋ねします。

3-1.　卒業論文を執筆する上での構想を練る段階，論文全体の構成を考えて行く際の指導教員の指導についてどのように感じましたか。

a. 論文の構成についての指導が不十分であった
b. どちらとも言えない
c. 論文の構成についての指導が十分であった

当該学生は，この問いに関し，c (「論文の構成についての指導が十分であった」)を選択した。肯定的に評価してもらったようだが，実際にはゼミで論文の章立てを本格的に考えたのは，2022 年の 1 月に入ってからであり，進捗は例年に比べてかなり遅い方であり，大いに反省せなばならない。

3-2.　実際に論文として執筆した文章についての指導教員の指導(文章の校正，表現面での指導等)についてどのように感じましたか。

a. 文章についての指導が不十分であった
b. どちらとも言えない
c. 文章についての指導が十分であった

当該学生は，この問いに関し，b (「どちらとも言えない」)を選択し，付け加えて，「自分の考えやゼミにおいて担当者と論じ合った内容を英語で表現することが非常に難しかった」と述べた。昨年度も同様のことを記したのであるが，実際の論文執筆の指導の際には，文章表現よりも，議論の展開，用例の提示順等に焦点が当たることが多い。そして，指導学生が執筆した原稿に手を入れる際に，議論の構成，展開を修正するのと同時に，文章を(英文法上，語法上の指導なしに)全面的に修正することも多い。両立させるのはなかなか難しいのであるが，今後は，議論の展開に関する指導と同時に，表現面での適切な指導をなるべく出来るように努めたい。

まとめ: 今回の聞き取り調査の結果から判断する限り，今年度の筆者の卒業研究/卒業論文指導およびゼミは，調査の対象となった受講者にとって，ある程度肯定的に評価できるものであったようである。実際完成された卒業論文においては，少なくとも日本語において，LOVE IS A PLANT. (愛は植物である)というメタファーが働くことが具体的事実に基づいて示され，日本語話者が「愛」というものを植物の生活史(life-history)になぞらえて理解し，表現していることが明らかになった。担当者の力量不足，経験不足もあり，この成果をメタファーについての全般的な研究史の中に適切に位置付けて評価することは難しいが，内容的には極めて興味深いものであると考えられる。

地域社会を核とした教育と研究のつながりについて: 専門性が高く，かつ特定的なテーマについての研究に関する指導を行うことを念頭においたため，地域社会を核とした教育と研究のつながりを強く意識した授業内容は設定しなかった。

謝辞: 最後に，聞き取り調査にご協力いただいた「卒業研究」の 1 名の受講生に感謝したい。